

# シルクロードを訪ねて

民主党無所属ネット議員団・ウズベキスタン調査団

中村哲之助議員のウズベキスタン訪問記

私たち民主党無所属ネット議員団に所属する6議員は4月18日～25日、ウズベキスタン共和国（以下UZ国）を訪問した。

UZ国は世界遺産の宝庫といわれ、またシルクロードを通じて古代からわが国に様々な文化を伝えてきた。さらに、ソ連からの独立後、積極的に市場経済化への取組みを進め、観光行政などについても大きな課題にしていると聞き、この国を視察しようと昨年秋に決めた。また2月～3月の定例府議会開会や、各学校や地域の諸行事との関連もあり、訪問時期を今年4月中～下旬とした。今回の視察にあたって、現地の計画を担当してくれた人達からの事前説明、勉強などを行い、国情・地勢などの概要を一定理解した上で出発した。

今回は府議会の公式な海外行政視察ではないが、UZ国を少しでも皆さんに知っていただければと思います。旅日記風のレポートにした。なお、このレポートは、統計資料や年鑑などで容易に知ることのできる部分はあえて省略し、訪問した都市・地域の印象などを中心にまとめた。ご一読いただき感想をお寄せいただければ幸いです。

## 初めてのUZBEKISUTANへ（4月18日・火）

私たちが関空へ集合し、結団式などを行ったのは8時である。この時刻に間に合わせるためには枚方市からのバスではうまくいかず、守口市駅6:30発のリムジンで関西国際空港（KIX）へ向かうことに。7:45にKIX着の予定が15分も早く到着した。Bチェックカウンターの前に行くと、添乗員としてお世話になるMOツールの刀根清美さんが待っていてくれた。15～20分くらいの間に各議員が次々に到着し、荷物を預けた後、8:20に3F特別待合室「なにわ」に集まり結団式。

ここで、最後の打ち合わせやチェックの後、出国・搭乗手続きをし、クラブANA（ラウンジ）で休憩。コーヒーを一杯いただいた。10:05発HY 526便への搭乗を始める案内が9:40にあり、機内へ。私の座席は05 Kである。20分程度で動き出し、すぐに離陸するはずであるのに、滑走路が道路で言う渋滞で順番待ちの状態となり、離陸したのが何と10:48に。

いよいよ8時間30分の飛行である。上空での安定飛行に入るまではシートベルト着用サインが出され、誰も席を立てない。ウエルカムドリンクにアップルジュースをいただき、2日前に購入した小説（佐伯泰英の密命シリーズ）を読む。添乗員は「機内に入って、キャビンアテンダント（CA）＝スチュワーデスのサービスなどをご覧になれば、UZ国の感じを掴めますヨ」と語っていた

が、果たして 。

30 分余りで自由にくつろげる状態になり、サイドテーブルを座席の袖から出そうとしたが、どんなに引っ張っても動かない。CAを呼んでも出せず、このことに慣れた男性が何とかしてくれた。そんな風景があちらこちらで見られる。テレビも個人専用ではなく、前に小さな画面がひとつあるだけである。食事の前にドリンクをとということで、またアップルジュースを頼んだ。お昼から多くの人達がビールやワインなどを飲まれているが、私は昼のアルコール、それも機内でのというのはどうも苦手である。

飲み物が一通りいきわたると、食事。出発前に和食か洋食の選択ができると聞いていたが、CAは私には何も聞かず、「プリーズ」と言って洋食を置いていく。普通はメニューが座席に置いてあり、乗客がそれを見て判断するのに、そのメニューさえも用意されていない。前の座席の背もたれのポケットにはウズベキスタン語の機内誌とみやげ物用のパンフレット、エチケット袋しかない。私の隣はポンと和食を置かれてしまった。日本の飛行機では考えられない態度・やり方である。しかし、彼女たちはいやいや仕事をしているわけではない。時には笑顔で応じている。いわゆる「国の違い」なのである。私はもともとパンが好きだし、チーズが食べたくって洋食にしようと思っていたので、それを早速食べる。好きなチーズは全部食べるが「生野菜は下痢のもとだから、できるだけ口にしないように」と事前に言われていたため、一切食べない。しかし、考えてみると、KIX 発の便は大阪でこの食事を積込んだはずで、そんな心配は要らなかったの、しまったと反省。

最近の飛行機の食事で考えさせられるのは、ナイフ・フォークなどの食器がすべて「安全性」を考慮して、プラスチックに変わってしまったこと。最近の事件・事故を考えるといたし方ないと言えるが、味わい度は落ちてしまい残念だ。平和で安全な社会が到来することを願う。

**今回** のフライトは朝の出発で、14:25(日本では 18:25)にタシケント到着予定なので、離陸から着陸まで、ずっと機内から眼下を見ることができる。14 時過ぎ、日本と UZ 国の時差 4 時間を調整しようと時計を現地時刻に合わせた。現地はまだ 10 時過ぎだが、食事が終わる頃になると多くの人が窓のブラインドを降ろし、くつろぐ人がでてきた。私も 2/3 ほど降ろし、小説を読み始める。そして時々、小説を置いて暫く休憩。TV 画面にはアンジェリーナ・ジョリーのアクション映画を上映している。(字幕は日本語)



少しブラインドを空けた窓から下を見ると、雪・氷に覆われた山脈、赤茶けた岩肌...など、天山山脈の広大な様子が眺められる。富士山よりも遥かに高い山々が、時にはその2倍を超える山々がそびえ立ち、それも何百何千と並ぶ姿は圧巻・威容である。

12:30になるとサンドイッチがでてきた。サーモン・カニ・玉子などがそれぞれに挟まれ、結構美味しくいただいた。ここでもまたアルコールは遠慮した。

私たちの乗るHY 526 便は 14:55 にタシケント国際空港に着陸。添乗員の刀根さんから「皆さん、外気温は 28 ですヨ」と言われビックリ。ドアが開き外へ出ると、日本を出発した時よりも少し暑いくらいで、言われた程の気温差は感じない。ウズベキスタンに着いたのに、この空港で降りる人は私達を入れて 20 人足らずである。飛行機はほぼ満員だったのにと考えていたが、大半の人達はここで降りず、乗り継いでトルコなどに行くようである。従って、入国手続きの前に並ぶ人はパラパラである。

しかし、ここから私達には想像もつかない事態が始まるのである。まず、預けた荷物が出てこない。30 分、1 時間、.....いくら待っても出てこない。その間、荷物を預けなくて機内持ち込み用のバックだけで出ようとした女性が止められ、30~40 分もの間、下着 1 枚にいたるまで全部チェックされている。そして、別の係員が同じことを二度、三度と繰り返す。一体この国はどうなっているのかと疑う。それを興味深く見ていた私達のところに、その係員がやってきて「どこから来たか?」と尋ねる。「日本からだ」答えると「オー、日本、大阪か?」と言う。「そうだ。大阪府議会議員 6 人だ」と答えると、冗談半分に手を広げて「オー、ベリー、ビップ」と言う。

添乗員は「皆さんのことは、こちらの主要な機関には連絡が入っている。当然、空港関係者にも届いているので、それで大阪からかと尋ねた。皆さんにはあんな検査は多分しないと思いますヨ」との説明。

この国に来たら、この国のルールや習慣があるんだからと、全員が気長に待機。ようやく 1 時間 40 分経った 16:40 にそれぞれの荷物が出てきた。やはり、何のチェックもなく、これを手にしてミニバスに向かう。この先どんなことがあるやら分からないが、第 1 日目のホテル・インターコンチネンタルへ着いたのは 17:03 である。フロント前のロビーでいろいろな連絡や調整を行い、夕食のため、19:00 にホテル 1F のロビーに集合を決めて解散。812 号室に入るともう 17:40 である。

部屋に届けられたトランクを開け、寒いからと言われて機内持ち込み荷物にしていた春物のコートやセーターなどを詰め直し、シャワーを浴びた後、湯を沸かしてゆっくりと焙じ茶を飲んだ。「タシケントのホテルは大阪のホテルと何一つ変わらないですよ」と言われていたとおり、水も湯も充分すぎるほどに出てくるし、デジカメ用の電池の充電も国内と変わらない。

19:00 まで少し時間があるので、ホテル 1F のロビーへ行き、両替所でUZ国のお金に両替。添乗員に聞くと、「5,000 円程度がいいですよ」と言うので、とりあえず 5,000 円分両替する。こちらの通貨は「スム」で、レートは 1 円で約 10 スム。両替すると 51,750 スムになった。しかし、最大の紙幣が 1,000 スムであるため、紙幣は 50 枚以上になり、輪ゴムでとめて渡される。他の議員

もやはり私と同じように両替に降りてきてそれぞれがスムに替える。みんな、一気にリッチになった気分である。

19:00 に夕食会場へ向かう。夕食は洋食であるが、考えると日本では既に夜 11 時を回っている。今朝は 5 時過ぎに起床し、一日が本当に長い。おまけに大陸性の気候は朝夕がグンと冷え込むといわれていたのに、半袖でも十分なくらいで、体調が狂うのではないかと心配だ。私自身、2～3 日前から少し喉の奥がおかしく、風邪の前兆があったので、サウナに入って汗を流し、早く体を休めようと思う。

ところが 21 時 30 分頃にサウナから部屋へ帰ってきて、セーフティボックスを開けようとする、これが開かない。説明書に書かれたとおり、あらかじめテストまでして現金などを入れたのに、何度やってみてもダメで、仕方なしに電話すると、フロントから女性がやってきた。しかし、彼女がいくらチェックの機器を当ててやってみてもドアは開かない。これは「Accident」と言い、部屋の電話を貸してほしいと、誰かに TEL。彼女は「明朝にもう一度来るので今夜はこのままに」と言って出て行ったが、10 分ほどするとバールのようなものを持った背の高い男性とともにやってきて、「これは修理できないと思うので、今からこれを外し、新品のセーフティボックスに入れて持ってくる」と言って、土台から剥がしてしまった。私は中に貴重品が入っているので、このことを電話で改めて添乗員に尋ねると、「このホテルは大丈夫。二人だし絶対に間違いない」と言う。約 20 分して、ピカピカのセーフティボックスを持ってきて、元のところに取り付けた。

パジャマに着替えて早く寝ようと思っていたのに、サッパリだ。しかし、翌朝の出発前にごたごたせずに助かった。私は二度とこんなことがあっては困るので、セーフティボックスは使わないことにした。先の思いやられる一日目であった。

## ユネスコなどを訪問 (4 月 19 日・水)

この日は朝からユネスコなどを訪問する予定になっている。夜にはサマルカンドへの移動もあり、かなり日程もハードなため、十分な食事をしておくように言われている。モーニングコールは 7:00 の予定。

しかし、私は何度も夜中に目が覚めた。2 時、4 時、5 時 30 分頃と 3 回も目を開いた。深夜の 2 時は日本時間で 6 時だから、体が覚えてしまっているのだろうか。部屋が相当乾燥しているため、ノドがいがらくなって、咳が出る。5 時 30 分にはベッドから抜け出て、湯を沸かし、持ってきたお茶を飲み、ホッとす。そして、昨日のメモを見ながら、旅日記を付け始める。そうしないと、海外の場合は、2～3 日経ってしまってからでは訪問先の相手の名前や重要な出来事を思い出せないのである。

UZ 国のはじめての訪問場所はユネスコである。ユネスコまでは 10 分くらいとのことで、9:30 に出発すればよいらしい。荷物を 9 時前に出し、ロビーでゆっくりとコーヒーを飲む。タシケント

で1, 2位を争うホテルということで、さすがに落着いている。しかし、なぜこんなにいつもホテルは高いのだろうか？ 1杯のコーヒーが4,300スム、日本円で約430円である。毎月の平均所得が1万円余りだというのに異常である。このホテルは宿泊費も275USドル/日で、ミネラルウォーター(500ml)は1本3ドルだ。観光客用価格かもしれないが高すぎる。もちろん日本の一流ホテルで飲むコーヒー1杯1,000円よりは安い、物価から考えると信じられない思いだ。

9:30少し前にホテルを出発。今日は28~30になるらしい。ミネラルウォーターをバックに2本入れている。ユネスコには9:40に到着。警備は厳重である。ピストルなどを携帯した警察官や警備員が門を開け、私達は中に入った。早速、名刺交換し挨拶。



前列左から中村、山添、半田

後列左から土師、富田、バリー・レイン、アヴド  
大友の各氏

ウズベキスタン・ユネスコ代表のマイケル・バリー・レイン氏から私達に、現地の取組み状況と課題を説明してもらった。これを現地ガイドのTurapova Nargizaさん(女性)が日本語で説明。

- 1) UZ国にある世界遺産と歴史的建造物の保存・修復には、大変な労力と財源を必要とする。
- 2) 都市基盤整備を進める財源も十分ではないため、どうしても文化財などへ充てる予算が少ない。
- 3) ソ連からの独立後、UZ国としては経済発展の最中にあるが、古い歴史的建物と現代的な街づくりが一体的に配慮されたものにしなければならない。
- 4) UZ国の伝統的産業を育成し、それを海外へ輸出することによって、産業従事者の生活を支え、勤労の意欲を高めていくことが大切だ。最近ではシルクのカーペットなどは欧米へ数多く出されている。
- 5) JICAとの関係も重要だ。今年9月にヒバ(KHIVA)で大規模な文化祭を開き、アラル海周辺地域の発展もめざしている。そのため、みやげ物販売の成功へ京都へも派遣し、また招いている。
- 6) テルメズ(UZ国の東南端)には京大の加藤教授がおられ、何年も発掘作業に従事、指導している。
- 7) 毎年5月、シルクロードの伝統的行事を実施している。これにはNHKもやってきて放映してくれている。

などの説明を聞き、私達は



- 1) UZユネスコには、どれほどの機関・人・お金が関わっているのか。
- 2) 最近のアラル海の危機的状況を日本で聞いているが、どうなっているのか。また、どのように対策を講じるのか。
- 3) 世界遺産を守るための労苦で何が一番大事か。
- 4) 保存・修復のための専門家の育成とその技術向上にどう取り組んでいるのか。

などの質問を行い、なごやかに意見交換を行った。また、その際、先頃の奈良での遺跡の保存・修復作業で大きな問題を起こしたことなども話題に上った。

**この** ユネスコで応対されたアブド・カディール・エルガシエフ (Abdu-Kadir Ergashev) 教授がこの後、UZ国をずっと案内してくれたが、その時は、まだ知らなかった。

11:00 にユネスコを退出し、JICAウズベキスタン事務所へ向かう。11:10 にJICA (Japan International Cooperation Agency) 着。

この日、朝から急にUZ国政府との協議が入り、所長不在だったが、浅見栄次氏と懇談できた。

1991年8月の独立から2年後の、1993年にJICA事業を始め、すでに10年以上が経過している。JICAは

#### 1) 市場経済化への支援

中央アジアの中心地・UZ国はかつてモスクワ、レニングラード、キエフに次いで第四のまちであっただけに、インフラはある程度整備されているが、国民の意欲は一向に改革されていないように思う。

#### 2) 社会セクターの整備

医療・教育・環境への取組みを強めている。例えば、病院では看護師は医師の指示によって動き仕事をする。行政や他人の声には絶対耳をかさない。そのように教え込まれてきたため、予防医学なども進まない。あくまで病院は病人のためにあり、それを医師が診察し指示。看護師が手当てするわけで、コスト面からも見直しを進めている。

#### 3) 経済インフラの更新

UZ国はどこへ行ってもガス・水道・電気はある。しかし、インフラのメンテナンスのための財源がない。UZ国は旧ソ連のやり方をそのまま踏襲してきた。例えば人口5万人の地域へ100万人規模の設備をつくる。見た目にはよいが、中身はどうにもならない。維持費などムダな経費は計り知れない。

など、3点に対する支援を重点的に行っているとの説明があった。

JICAは日本人7人、青年海外協力隊などの18人を含め、現在63人である。我が国とUZ国との関係は良好で、今後とも日本と交流を深めたいとのこと。

ソ連のアフガン侵攻後、急速に欧米諸国とりわけアメリカと友好関係が深まり、米軍基地なども置かれていたが、昨年5月のUZ国東部での暴動と大統領の対応に対する厳しい批判によって、関係は相当悪化した。昨年秋、アメリカは基地の撤去を行ったが、これはその表れと思われる。その

一方で、ロシア・中国が最近では接近しているとのことである。

JICAから見ると、中央アジア5カ国(カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタン、UZ国)の中では、カザフスタンが一番市場化は順調で、UZ国とトルクメニスタンが遅れているとのこと。日本は毎年8~10億円支出しているが、実際の事業費としては2億円くらいのものである。



JICAでの懇談のあと、私達は日本センターを訪問し、ディレクターの稲葉 泰氏に迎えられた。ここでは日本語や文化を現地の人に幅広く知ってもらい、日本への理解を深めるため、様々な取り組みを行っている。この日は、幼稚園くらいの子どもから年配の女性まで、熱心に折紙などに悪戦苦闘していた。

私達の視察と懇談が余りにも熱が入り、近くのウズベキスタンホテルの17階のレストランで昼食をとったのは13:00。JICAの浅見氏も同席され、約1時間、和やかに懇談をした。

14:00 すぎに食事を終え、続いて14:30~15:00 着の予定になっていたマリカ紡績工場へ向かう。

14:40 に到着。相当に古い工場で、1949年から操業しているが、ソ連からの独立後はフル稼働していないようである。ここでは下着やTシャツなどの綿製品を作っている。UZ国はサッカーが強く、また各地で盛んに行われており、選手のユニフォームをここで作っているのが誇りだと語っていた。従業員は現在では100人にまで減っている。8:00~16:30が勤務の時間で11:30~12:00が休憩。給料は50ドル~60ドル/月。働いている従業員は全員が若い女性で、高校~大学生くらい。大型の注文がくると全員で仕事するが、そうでない時は1/3~1/2くらいしか出勤しない。日本の



ように工場で色々な製品を大量に作り、それを全国各地の店舗へ卸して販売というよりは、必要に応じて生産するという感じである。また、作業に使用しているマシンは、かつて我が国でよく使われていたJUKIの足踏みである。

ソ連から独立したUZ国の産業と操業中の工場の状況を見たいと、今回の調査項目の柱にしていたが、市場経済化とインフラ整備は遅々として進んでいないと感じる。

15:45に退出し、10分程度のところにあるUZ国の百貨店を20分ほど見学。客はほとんどおらずガラガラ。どうしているのか不思議だ。休憩後、夕食のため中華食堂(NEW SHANHAI)へ。次の訪問地サマルカンドへ飛行機で向かうために残りゆっくりとはできない。しかし、中華食堂でチャ

ーハンなどの食べ慣れた物を口にするとやはり落ち着く。(日本で食べている中華の味とは少し違うが.....)

18:30 に退出し、タシケント空港へ向かう。19:00 に到着すると、そこにはユネスコ事務所でお会いしたアヴド先生がわざわざ出迎えてくれた。しかし、ここからがまた大変だった。UZ国の国内線であるのに、国際線と同様に厳しい荷物検査とボディチェック。さらに空港は極端に照明を落としているため、陰気このうえない状況。搭乗のため、専用バスで飛行機まで移動するのにライトは点灯しないし、車内の明かりも点けない。待合室も50人くらい待機している部屋に小さなライトが一つあるだけである。

19:45 発HY1301便は20:15に離陸。丁度1時間後の21:15にサマルカンド(世界文化遺産指定都市)に着く。何と、この日は5分くらいで荷物が出てきた。荷物を運ばせてほしいという人達やタクシーがわんさと集まっている。

21:45、この日の宿泊ホテルのプレジデントに到着。私の部屋は702号で、ここには2日間泊まるので、スーツやカッターなどを出し、クローゼットへ吊り下げたりしていると23時近くになっている。風呂に入ろうと思ひ、バスタブに湯を出す、なかなか一杯にならず、湯もぬるい。これでも上等のホテルだと言われているので、ゆっくりと湯を沸かしながら待つ。お茶を飲み終わっても、まだバスタブは一杯にならない。底に寝るようにして漬かり、何とか風呂に入ったという感じである。本当に今日も疲れた。明日からはサマルカンドの世界遺産などの視察である。

## タシケントで気づいたこと

### (1) 実に緑が多く歩道が広い

国際空港から街の中心地までバスで20分弱である。お世辞にも道路整備がされているとは言えないほどに振動したが、車窓からの緑は見事としか言えない。大阪や東京、杜の都・仙台などでも遠く及ばないほどに緑でいっぱいである。中央分離帯でも幅が数メートルのものまであり、そこもすべて芝や草花で覆われている。いたる所に公園があり、広葉樹は静かな日陰を作り、そこでは30近い暑さであってもほとんど汗をかかない。



空間という空間が緑で、まさに緑で覆いつくされた町という感じだ。歩道と車道の間には文字通り緑のじゅうたんが敷きつめられている。250万人もの人が住む大都会そのものがオアシスである。

ただ、道路・歩道に面した樹木には、その大きさにかかわらず、全て1m程度の高さまで、幹を真っ白に塗ってあるのが残念である。これは夜間の照明(街路灯・防犯灯)が不十分なため、車の



事故などを防ぐためにしてあるもので、中国でも同様のものが多くあった。

## (2) 警察官が異常に多い

中国でも警察官は多いと思ったが、その比ではない。また多くの人達が利用する施設(ホテルなど)には警備員で溢れ返っている。私達の宿泊したホテルでも10人近い警備員が道路からホテル敷地へ入る、または出る際に、いちいち車を止めてチェックする。道路を朝夕に散歩して前後左右を見ると、必ずどこかに警察官の顔が見えるくらいだ。これでは大阪で多い「ひったくり」など、誰かが大きな声を出せば、近くの警察官らが走ってきてすぐに「御用」になるだろう。しかし、これは雇用対策の一環であるようだ。

## (3) 信号が少なすぎるが事故は少ない

多い緑とは逆に、交差点に信号はほとんどない。よくこんなことで事故が起こらないのかと不思議である。さらに道路の幅が広く、大抵は片側3~4車線はある。従って、車は平行に停めず、縦に停めているのが多い。それでも日本のような渋滞にはならない。

それと驚くのは信号の3色ライトの大きさが同一ではないことだ。写真のように、一番上の赤ランプが他の約2倍ある。当然よく目立つ。我が国でも事故多発地点では、早速取り入れてはどうかと思う。



## (4) 市場経済化への道程は大変だ

旧ソ連時代からのシステムはなかなか改善されていない。むしろ、国民は変わらない方が良くと思っている人が多いという。政府はあと5年程度で完全に市場経済へ移したいようであるが、国民はそうではない。

(例) 住居費は電気・ガス・水道など光熱費込みで毎月2,000円程度だという。

これを市場化経済に向け、家賃を1,000円~1,500円にし、光熱費は別というアパートが最近できたが、光熱費を請求してもそのまま支払う人が少ないという。また請求自体もいりかげんで、ガス代が500円では高いと言われると、平気で300程度円におまけすることがよくあるようだ。

しかし、この制度の導入によって、エネルギーへの考え方が少しずつ良くなってきているようで、些細なことからも意識改革を進めなければならない。

## (5) 日本へ行きたいと言う若者が多い

日本からの情報はUZ国になかなか入ってこないようであるが、日本へ留学し、日本で働きたいという若者が相当いるとのこと。日本の戦後の驚異的な経済発展と古代からのシルクロードとの一

体感が強く、さらに3年余り日本で働くと、UZ国で小さなアパートを一棟建てるだけのお金が貯金できるらしい。

UZ国) 1人平均所得	1万円余/月	年間約15万
日本)	"	年間300~400万円

## (6) 日本車は一台もない

欧米では数多く走っている日本車も、ことUZ国では1台も見られない。UZ国・ロシア・韓国車ばかりである。高級車は時々メルセデスを見るくらい。

以前は韓国企業との合併で自動車が大量に生産されたが、その後、UZ国単独で生産ラインを整え安く売り出しているようである。欧米車、日本車は欲しくても高額なために手が出ないようだ。

さらに、もうひとつ驚くべきことに、ここでは自転車・バイクをほとんど見ないのである。中国は街中が自転車・バイクの洪水なのに、どうなっているのかと尋ねると、夏は40を超え、冬は-20にもなるため、長距離通勤などには使用できず、軽四輪がもっぱらのようだ。

## サマルカンドの世界遺産を見学(4月20日・木)

7:30のモーニングコールだったが、6時過ぎに目が覚めた。体も慣れたのか、夜間に目を覚まさないようになったのでホッとす。もう一泊するため荷物をまとめなくてもよいので助かる。小説の続きを8時過ぎに読み終え朝食に。いつものように玉子2個で具をいっぱい入れてオムレツを作ってもらい、美味しそうに湯掻いたポテトと温野菜(人参)、ヨーグルト・コーヒーの食事をとる。

このホテルはタシケントのようにメニューが揃っていないが、別に悪くもない。ツアー客が大勢食事をしているということもなく、日本の普通のホテルのように非常に静かだ。もちろん部屋にスリッパ・湯沸し器・バスローブ・歯ブラシなどのセットはない。ゴミ箱も浴室に一つ置かれているだけ。さらに部屋が少し暗いと思ってスタンドを見ると電球が付いていない。TVも日本人向けはなし。隣のA議員の部屋は洗面のストッパーがなく水も溜まらない。しかし、サマルカンドで有数のホテルだと聞いていたので、何となく納得。先に食事をされていたアヴド先生も、「中村サン、オハヨウ」と覚えた日本語で、笑顔で挨拶される。

9:20にホテルを出発し、5分ほどでグル・アミール廟に到着する。到着すると早速、現地ガイドが「写真を撮る建物の中で撮ってもよいが、その場合は1人につき1,000スム必要」と言うので、1,000スム支払う。

このグル・アミール廟はタジク語で“支配者の墓”という意味でティムール一族の霊廟である。青の都と呼ばれるサマルカンドでも、その色の鮮やかさは格別だという。この廟は1996年に修復が終了し、建設当時の面影をほぼ取戻したようで、内部を覆う紋様に3kgの金を使用したとのこと。墓石も順に並べられ、亡骸は地下3mのところにある墓室に安置されている。

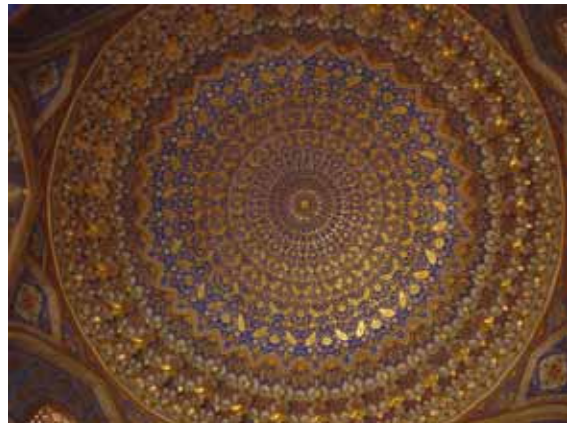
ここに併設されていた元の寄宿舍などには数多くのみやげ物店が入っていて、私はコーランなどの書物を読む際の本立てを購入した。10,000～100,000 スムくらいまでの値段で大きさ・彫刻はいろいろ。



40分ほど視察した後、レギスタン広場へ向かう。(レギスタンとは砂の意) 10時前に到着すると、ここでも写真撮影は1,000 スム。

ここには広場の西側にウルグベク・メドレッセ、東側にシェルドル・メドレッセ、中央にティラカリ・メドレッセが配され、見事なほどの青のタイルで飾られ、紺碧の空に不思議にマッチし、青さの競争をしているようにさえ思える。ティラカリというのは金箔で飾られているという意味で、礼拝所の天井は見事なまでの技巧である。ドーム型に丸味を帯びて見える天井は、実際には平面で、細かい遠近法によって描かれたと聞き、感心・感心である。この天井にも3kgの金を使用しているようである。

アヴド先生から、レギスタン広場の歴史の説明を受けた。ソ連時代に相当な修復がなされ、長年の間に堆積していた土は2mにも及んでいたらしい。



## ウル

グベク・メドレッセはその名のとおりに、建造者のウルグベクの名をとっている。

自らが天文学者でもあった同氏は、この神学校の教壇にも立っていたようである。また、ここのミナレットは少し傾いているが自重のせいだと言う。将来のため、一定の対策を講じておく必要があるとのこと。また、このレギスタン広場では、三つのメドレッセが生み出す調和を後世に伝えていく必要性を認識させるため、ユネスコなどとともに、音楽会などの行事をよく行っているようだ。

シェルドル・メドレッセはライオン・鹿・太陽などが描かれ、およそイスラムの建築では考えられない紋様を描いている。



アヴド先生は「世界各地の方々にもっとここへ来てもらい、イスラム建築の素晴らしさを伝え、さらにこの貴重な世界遺産の保存に努めたい」と熱っぽく語られた。ここのメドレッセもみやげ物店がぎっしりと並んでいる。元イスラム神学校で世界遺産となったこの中で、よくこれだけの商売を認めるものだと半分あきれるが、テナントの出店料が相当入らしく、この方針は変わることはないようである。

この後、近くにあるシャーヒズンダ廟群に立ち寄った後、私達はU Z国の伝統的な料理を出す店・シャリクで昼食。大きな串に刺した肉料理などをいただいた。

食事の後、私達は13:20に近くのバザールへ案内してもらった。このバザールはU Z国の市民の生活と物価・暮らしなどがストレートに理解できる。大変な賑わいと豊富な商品には驚かされる。このバザールでは品物売るためのスペースとして、1区画500スム/日を出せばよいらしい。30分ほどでバザールを出て、天文博物館へ向かう。



14時から博物館(入場料300スム)で、天文台の復元図やウルグベクの功績などの展示を見学した後、残されている天文台の基礎と六分儀の地下部分へ案内してもらった。地下の11mと合わせてかつては40mの高さがあったと言う。ここで彼は観測を続け、1恒星年を365日6時間10分8秒とした。今日、超精密な機器を使用して計測した数値が365日6時間9分9.6秒で、その誤差は1分にもならない。かの有名なガリレオが地動説を唱えるのが、まだこれよりも100年先であることを考えると、今から約600年も前に何と素晴らしい学者であったのかと驚く。

1時間余りの視察でホテルへ帰り部屋に入ると、昨夜はなかった電球を入れてある(朝方に指摘しておいた)ので明るい。18時からの夕食までには少し時間があるので、バスタブに湯を張りながら今日1日の視察メモをまとめる。湯の具合を見に浴室へ行くと急に後方で、「ボン」と何か割れたような音がある。何事かと思って部屋に戻ると、何とスタンドの電球が破裂し、ガラス片が粉々になって飛んでいる。添乗員を通じて清掃と取替えなどを要請すると、すぐにメイドがやって来た。しかし驚くことに、彼女は何と素手でガラス片を拾い、おまけに手の平を雑巾代わりにして掃くようにガラス片を集める。「危険だから掃除機を持ってきて下さい」と言うと、「わかった」と答えてとりに行く。暫らくすると元どおりになったが、電球の割れた理由がにくい。「メイド・イン・

チャイナ」と言うのである。

メイドが掃除を終え、新品の電球に取り替えて暫らくすると、フロントの女性が申し訳なかったと大瓶のミネラルウォーターを持ってきた。さらに食事から帰ってくると、部屋には今朝方部屋を出て行くときに置いた1,000 スムがテーブルに返されていた。何か気の毒な気がする。

翌朝、現地ガイドにこのことを伝え、「そうだ、私も経験している。中国製はよく壊れる」と答える。だったら、別のものを使えばよいのだが、これがこの国の普通の考え方のようだ。

## サマルカンドで気づいたこと

### (1) タシケントよりは落ち着いた町だが

ここサマルカンドは古くから栄えた町で、世界遺産が数多くあるだけに、町のあちこちで悠久の歴史を感じる。遺産の見学に多くの外国人が訪れているが、日本人にも時々出会う。丁度、日本でいう京都・奈良に近い。

しかし、歴史的建造物などのある場所では、私たちの車が止まった途端に、「        」と、お金を求める「物乞い」が集まってくる。15~16 歳くらいの女性が乳飲み子を抱いていることもある。悲しい現実を目の当たりにし、豊かな国へ、誰もが安心して暮らせる国へ、改めて政治家の使命を痛感する。

### (2) 修復は余り進んでいないのでは？

ユネスコは多くの団体と共催で、レギスタン広場などで大規模なお祭りを行い、遺産の保護・修復などを進めようとしている。資金集め・啓蒙の両面からだが、それがそんなに成功しているようには見えない。私たちが訪問した世界遺産でも、所々に足場を組んであったが、まったく人がいなかったり、こんなものでどうするのかと思えるような機器材しか置かれていない。わが国の保存・修復などと違い、並大抵ではない。また、痛みも激しいところがかかなりあり、修復作業のピッチを上げないと、このままではダメになってしまうのではないかとさえ思われるところがある。





### (3) トイレ・水を何とかして

バザールやレストランなど、不特定の人達が多数集まる所で、「トイレ」がどうにかならないのかと思う。バザールの有料トイレ(1人・1回=100 スム)に入ったが、鼻を突く異臭、そして水が出ないという状況。しかし、トイレから 20mほどの所にある水路沿いでは、水が勢いよく出ていて野菜などを洗っているのである。商売のための水は豊富にあっても、トイレなどで水が流れないでは、観光客はやってこない。男性はともかく、女性はU Z国ではトイレに苦勞する。風呂でもバスタブに湯を張るのは一苦勞である。

## ブハラの産業と遺産などを学ぶ (4月21日・金)

今日はサマルカンドを出て、ブハラ(ユネスコ世界遺産指定都市)へ向かう。モーニングコール6:45、荷物出し7:30、出発8:00の予定である。

この日はかなりの人が早くから朝食をとっていたので、私が行くと、もう昨日のようなポテトはなく、オムレツを頼むにも行列ができていたので諦めて、コーンフレークに牛乳、ベーコン、オレンジジュース、ヨーグルト、りんご1個、コーヒーとし、生野菜のトマトやレタス、胡瓜などは用心して食べなかった。

8:05に出発。目的地のブハラまでは約300kmあり、羊毛工場には5時間近くかかるらしい。道路も相当に傷んでいて振動するので、我慢してほしいと言う。このホテルを出る時、タシケントのホテルでも渡された滞在証明書のような用紙をくれた。

ホテルを出ると、10人余り乗ることのできるミニバスが多く走っている。わが国のワゴン車より少し大きいくらいで、路線バスである。どのクルマも満員で、手を上げるとどこでも停まってくれるようだ。勿論、常設のバス停もある。そのバス停はどこもいっぱいの人ばかりで、飲料水を販売している店も多く並んでいる。まるでわが国のスーパーの前の出店の様子だ。乗降は自由で誰でも160スム。ただ、相当の距離になる場合は、距離に応じた料金が必要になるらしい。「乗車チケットもないし、どこから乗ったかの証明用紙もないのに、一体どうしてその乗客の料金を判断するのか」と質問すると、バスは10人余りで、おまけに毎日乗ってくる人は大体馴染みの人が乗るので、問題はないという。

ホテルを出て10~15分もすると、道路の中央分離帯がなくなり、のどかな田園風景に一変する。広い土地とのどかな放牧風景、絹のための桑畑などが広がる。現地ガイドは約5時間あるので、U Z国のドライブイン・畑の栽培・灌漑用水・放牧・一般家屋などの様子などを順に説明する。ロバに乗って荷物を運ぶ人にも時々すれ違う。民家はそんなに立派とはいえないが、学校はどれもお金をかけている。

約 20 分すると突然、検問所が出てきた。3車線以上ある道路が1車線にされてしまう。特に車両を停めて検査するほどではないが、同じ国内・同じ州内で、このような所が 20 分程度の間隔で設けられている。



私達は2時間半ほどして、いわゆるドライブインで休憩。店舗内にも椅子などはあるが、外がやたらと広く、そこでお茶タイム。コーヒーを頼むとネスルのインスタントコーヒーで、場所も写真のように靴を脱いで座布団に。UZ国は、タシケントでもサマルカンドでもこのような席が割合にある。



郊外へ出ても市内と同様に緑は多く、車道・歩道と街路樹などは、少しの幅の水路に守られている。また、時々10m以上もあるような歩道・側道では、所々に売店が設けられている。

11 時少し前にナボイ州という地域に入る。途端に道路のガタガタはなくなり、交通標識も整備され、中央分離帯も出てきた。この町には有名な貴金属工場があるとかで、豊かなのであろう。しかし、その内に農地の緑は次第になくなり、砂漠化したような土肌が見える。そして、驚くべきことに、遙かかなたに「地平線」が見える。水平線は誰でも見ているが、なかなか地平線は見られない。また、検問所である。大抵の車は素通りだが、いい気はしない。経済効率も悪いし、何よりも権力を常に認識させ、自由な国づくりへ逆行するものではないだろうか。

暫らくすると、また緑が出てくる。先ほどの土地は土質が悪く、灌漑の効果がないらしい。所々できれいに均されているのは、ポテトかぼちゃなどをこれから植えるためという。

## 交通

標識や案内看板がないために、羊毛工場の場所が分からず少し迷ったが、12:44 に無事にカラクル羊毛工場に到着。ここは1926年からの操業で、ソ連時代からの工場としては唯一残ったものだ。今ではアメリカ・韓国・ヨーロッパなどへ主として輸出しているとのこと。また、羊が大半で、コート・帽子・長靴のようなものを主に作り、羊の皮1枚が4ドル程度で取引されている。

工場の大半は操業しておらず、ガランとしていたが、警備員はそれでも配置されている。市場経済化への道はまだまだで、欧米などの商社から自国の製品を安くたたかれても、「販路が見つかった」と喜んでいる感じだ。

約1時間程度の視察の後、昼食をとり、14:40にプハラのパレスホテルに到着。荷物などを置いて、30分程度で世界遺産現場の調査に出発しなければならぬので、とりあえず、デジカメの電池を充電しておこうと思ってコンセントに差し込んだ。

しかし、部屋を出る時、メインスイッチを切るとコンセントの電源も落ちる。これはいけないと思い、フットライトだけにして、他の電気を消して充電した。(しかし、夜ホテルに帰ってきたら、ベッドメイクに来たメイドがメインのスイッチを消してしまっていたので、充電できていなかった)



15:15にホテルを出発し、アルク城へ向かう。20分ほどで到着し、記念撮影の後、アウド先生から修復などの説明を受ける。中はみやげ物売り場のオンパレード。多くの人が感心しながらレンガで造られた巨大な城と城壁を見ている。古いコーランが何冊も展示されているが、保存状態は必ずしも良くない。暫らくすると、警備員と警察官が何事か言って、大きな錠前の付いた裏側の扉を開けた。そこは一般には公開しておらず、上客と見れば「チップ」をとってサービスをするようである。「勿論、彼らの懐に入りますよ」とガイドの話。市内が一望でき、ロシア革命時の爆弾の投下跡や、かつての栄華を偲ばせる破壊されたものがいたるところに散見された。

約1時間の見学の後、近くのカラン・ミナレット(カランとは大きいの意)へ向かう。16:26に到着。先ほどの城とは異なって、神秘的・厳かという佇まいである。このモスクの中には流石に売店はない(写真・左下)。広い敷地を中へ入ると、右側からお祈りの声が朗々と聞こえてくる。この場所はソ連時代には倉庫に使われていたが、独立後に再び礼拝所になり、最大で1万人が礼拝できるという。ここは内部の修復程度を見ていると大丈夫の感じである。





17:00 に退出し、近くの絹織物の製作所（右上写真）へ案内してもらった。ここでは女性が1本1本絹糸を絡めながら、熱心に作業している。60cm×1mの絹の絨毯を作るのに、女性2人で2ヶ月はかかるらしい。高くつくのは当たり前である。

私達は18:00からの民族舞踊を楽しみながらの夕食会場へ。ここでは民族舞踊だけではなく、周囲にある服飾関係の店舗のファッションショーも兼ねて、170cm くらいのスレンダーな女性が10人余り、次から次と登場する。踊りは実に静かで、3～5分程度で一つが終わる。どれもほとんどが同じ踊りで、スペインで見たフラメンコのような楽しみはない。食事はウズベク料理。このパンもサマルカンドと同様に美味しかったが、私自身はこの日、余り食欲がなかった。しかし、昨日の今頃の時間帯は大変な雨だっただけに、一日違いで大助かりである。



ホテルに帰ると丁度20時。汗を流そうと、バスタブに湯を張ろうとするがなかなか溜まらない。30分以上頑張っても10cmにもならないので諦めて、サウナへ。ところが、23時までOKだと言われ、ぜひ利用したいと言っていたのに、通路が閉じられている。ドアを叩くと後方から「クラウド」と言う。「私は23時までのサウナ利用を約束した」と片言の英語で言うと、「少し待て」と言ってフロントと相談。すると、「こちらへ来てくれ」とロビーの奥にあるラウンジの後ろのドアを開け、案内。6,000スムを支払うとバスタオルを1枚貸してくれた。更衣室もなく、「まあいいや」と廊下で着替えることに。しかし、サウナの室温は90を超えていて、いつもどおりに汗はすぐに出る。

サウナの後、アヴド先生のお誘いで、ラウンジでビール・ワインを飲みながら、懇談。先生は熱心に遺跡の保存と修復にかける仕事の大切さと、ヒバなどでの遺跡保存計画＝ゴールデンリングを説明される。そして、「機会があれば日本の奈良・京都などを訪ね、歴史的な建造物などを見たい」と話された。私も「今回のUZ国への訪問で、現役の教授でもあるアヴド先生の案内でシルクロードを回れることに恐縮している。先生の温厚・誠実なお人柄に敬服する」と謝辞を述べ、「機会があればぜひ一度、日本へお越しを」と要請した。先生は、ソ連から独立後の暮らし、意識の変化、環境問題などにも触れられた。私は英語を片言しか話せないのので、「a little」と言うと、先生はゆっくりと話され、比較的分かりやすかった。22:30過ぎに解散。

## ブハラで気づいたこと

### (1) 電機・電話・水などの整備が急がれる

ブハラのホテルでは、ドライヤーも役に立たなかったし、セットし直したデジカメの電池の充電は何度やっても、パツ・パツと点滅するだけで、ほとんどできない。また、部屋の風呂に入らなか

ったのに、10cm 程度の水がひいた後、バスタブの底には少し色の付いたゴミのようなものがいっぱい付着していた。

さらに、部屋の電話機を使って日本へかけても国際電話も不通。聞くと、ホテル全体で外線が2本しかないらしい。だからいつも満杯の状態、受話器を取上げて掛けてみても「プー・プー」という反応がない。おまけに、KIXで借りてきた海外用の携帯電話も、使用できたのはタシケントだけで、サマルカンド・ブハラはともにダメで、圏外になってしまう。通信事情も整備が遅れているため、これらの早期整備が待たれる。

## 日本人墓地で平和を誓う（4月22日・土）

今日はタシケントへの移動日で、飛行機の時間帯の関係で、9:30に出発の予定だが、6:10に目が覚めてしまった。

8:00に食堂へ行くが、メニューは少ない。コーンフレーク+ミルク、チーズ、ヨーグルト、コーヒーにし、体調管理のため、生野菜は一切口にしない。

私たちは9:30にホテルを出発する。わずか10分程度でブハラ空港に到着。国内線であるのに、なぜ時間をかけてここまでのチェックが必要なのかと思うほどの、ウンザリとする手続きが待っている。搭乗券にまで、パスポートに押すのと同じような、Security Service 22 APR 2006 というスタンプを押す。50人乗りの10:45発のHY1322便はほぼ満席である。CAが形式的に「安全ベルト」というだけで、乗客の状態をチェックもしない。さらに軍人・警官と一目で分かる制服姿の乗客？が乗っているが、横柄な態度でベルトもしないし、それを注意もしない。この国の悪い一面を見せつけているようで腹立たしい。そんな様子を見ている内に、YS機は丁度1時間でタシケント空港に着く。タラップを降り、専用のバスに乗ってターミナルに入る。いたるところにピストルを帯びた警察官が立っている。殺風景な30坪程度の部屋で荷物を待っていると、割合に早く出てきた。その荷物を持って通路へ向かうと、係官が「ここから出よ」と、鍵のかかったドアを開ける。何とそこはもう道路である。どうなっているのかと思う。

12:15に、タシケントで用意した専用車に乗り（荷物は別の車）昼食会場へ向かう。10分余りで日本料理の看板の上った、韓国風・日本風レストラン＝みどりに到着。添乗員が、「味付けは少し違うが、久しぶりに日本料理をどうぞ」と言う。私達はてんぷら・寿司・うどん・お造り・キムチ・ピピンバなどを食べ、すっかり満足。アウド先生も美味しい・美味しいと言って、堪能された。先生は特に山葵がお好きなようで、山葵そのものを口にされたりしていた。

## 昼食

後、私達は日本人墓地へ参拝するために、あらかじめ依頼しておいた花店に立ち寄り、14:40に市街の南西部・ヤッカサライ通りにあるムスリム墓地に到着。南東の一番奥に日本人墓地がある。第二次世界大戦でソ連の捕虜となり、強制労働に従事させられ、



帰国することができずにここで命を落とした 79 人が眠る墓地である。木々の茂る静かな公園のような中に墓標と記念碑が設けられ、それぞれの名前も記されている。実に美しく、草木一つ無いほどに清められていることに、私達は驚く。空地には花までが植えられ、1～2時間くらい前に水を与えたような形跡も見られる。私達は早速、花をお供えし、お参りをした。この地で倒れた人たちの無念を思い、誰もが目頭を熱くし、改めて、平和への取組みを強めていくことを誓った。U Z 国を訪問してからず



っと私達に付き添い、様々な問題を教えていただいているアヴド先生までが涙されている。同教授のお人柄に深い感動を覚える。



私たちが墓標の前で写真を撮っていると、現地ガイドが横にいた小柄な男性（70 歳くらい）を紹介し、「この方が父君とともに、この墓を守ってきてくれた」と説明。日本人が埋葬されている墓地は日ソ連の各地にあり、比較的多くの日本人が訪れる場所は国策として、ある程度の整備をしているということを聞いたりはしていたものの、父君亡き後 40 年間も...、何ということをして...と、私達はこの男性に深く感謝し、再び涙を濡らした。平和の大切さ、人の心の美しさを考えさせられる。私たちは少しばかりのお礼をし、この男性とともに記念撮影。

「天に星、地に花、人に愛」を実感する一時であった。この上は、誰も訪れずに放置され、草茫々の墓地がないことを願う。

先生とはここでお別れし、私たちはホテルへ向かう。今日の夕食は 18:30 からホテルの 2 階でとることになっている。シャワーを浴び、着替えてホテルの周りを散策してみようとロビーまで降りてくると、大きなラッパのような音が響いてくる。何かと思うと、18:00 からインド系のビッグファミリーの結婚披露宴が行われるため、音楽隊が出て、その歓迎をしているとのこと。披露宴はダンスをしたりして深夜まで続くという。私は早速、その音楽隊のところに行って「ハイ、ポーズ。」

夕食の広いレストランには、私達の外にはもう1組の男女だけしかいない。トルクメニスタンから来たという親子のような男女が、私達の側でギターとヴァイオリンでいろいろな日本の歌を演奏してくれた。久しぶりにゆったりとした一日だった。

## UZ と中央アジアの生活に触れる (4月23日・日)

今日は日曜日で、官公庁はもとより百貨店などの施設もお休みである。従って、私たちは8:00にモーニングコール、10:00出発とし、この街に住む人達の暮らしぶりをつぶさに見、都市基盤の整備状況などを学ぶことになっている。私はゆったりと寛いで、茶を飲み食事へ。今日は空いていたこともあり、卵2コでオムレツを作ってもらい、ポテト・トマト・チーズ・グレープフルーツ・ヨーグルト・コーヒー。このインターコンチネンタル・ホテルであれば、少々のお野菜は大丈夫と口に。コーヒーも他の二つの都市のホテルよりも温かく、日頃、日本で飲んでいるコーヒーとよく似ている。

私が4月18日、タシケント空港から中心部へ移動して来た時は、緑の多さに感心しながらもそんなに美しい街だとは思っていなかった。しかし、サマルカンド・ブハラと回ってくると、この国の興亡をある程度理解したのだろうか、すごい街だと思う。オアシス都市として2,000年前に存在し、シルクロードの拠点として繁栄。しかし、チンギス・ハーンらに破壊され、ティムール帝国として復活。近世になってロシアに組み込まれ、そして独立。中央アジアで地下鉄があるのはここだけである。

緑の多さは簡単に言葉で説明できない。また、街の中で見られる看板には、韓国系企業のSAMUSUNGという文字が躍り、ロシア語も一杯並んでいる。CANON、SONYなどの日系企業の看板はほんの申し訳程度に見られるだけである。

10:15 クカルダッシュ・メドレッセへ。これは16世紀に建てられた神学校で、今は男性のみ160人が学んでいる(15人で1クラス、4年制)。授業料はなしで、奨学金だけでやっていけるようになっている。ここを卒業すると、2~4ヶ月間、エジプトなどのアラブ諸国へ留学し、イスラムの先生や神学に就く。この学生たちは自分の特技を生かしてセラミックの絵皿や絵画などをつくり、それを販売している者も多い。30分余りで退出。

10:57に工芸センターへ。ここも以前は神学校だったが、今は絵画・陶磁器などの様々な工芸作品を製造・販売している。しかし、どの店舗も同じようになり映えがせず、入り口に近いところに客が集中している。ここも30分程度で退出し、次へ移る。

11:38に国会議事堂に着く。周囲は簡単な鉄製の柵があるだけで、ホテルや地下鉄、百貨店など、街の中にあれだけの警察官がいるのに、ここには見られない。一体どうなっているのだろうか。これではVIPの警護や国民の安全のためではなく、結局は国民の監視のための警察官だと思われて

も仕方がない。私達はこの前で記念撮影（左下の写真）し、近くの大統領府へ。ここも同じ景色である。



私達はさらにアムール・チムール広場から、日本でいう歩行者天国のサイールゴフ通りを見学（右上の写真）、広い道の両側にはぎっしりと店が並んでいる。祭りの屋台と同じである。日曜日でもあり、子ども連れの人達が結構いる。

12:26 に、私達はタクシーの地下鉄に乗車のため、ムスタキーリク・マイダニ駅へ。ハミッド・オリムジョン駅まで2駅乗ることにしている。

写真は地下鉄を示す看板



## この

地下鉄はソ連時代のままで、料金は全線 160 スム。ゲームのときに使用するプラスチック製のチップと同じものが「チケット」で、回収されて何度も使用される。このチケットを改札機に入れると、赤ランプが青ランプに変わり、固定されているバーが動いて中に入れる。入る時だけのチェックで、出る時にはチケットがないので、どこまで言っても同じ料金である。

ホームの端には、先程の電車がホームを離れてから「 分××秒」経過という電光掲示板が忙しそうに数字を早送りしている。地下鉄は常に5分間隔で動き、それなりの人が乗車しているのだからスゴイの一言。さらに、ホーム・壁・天井はすべて大理石で見事に装飾されている。しかし残念ながら、やはりチケット売り場も改札口もホームもすべて少し暗い。勿論、チケット売り場にも改札口にも警官が立ち、ホームにはピストルを持って2人もいる。

私達は2駅間を乗った後、再び専用車に乗り昼食会場へ向かう。ところが、5分ほどし、左折しようとした運転手が急ブレーキをかけた（この国は右側通行）。途端に警察官が呼びとめ、免許証などを提示させられている。何事かやりとりしていたが、乗車している客が日本人だということで、「堪忍してもらった」ようである。すぐに警察官が跳んでくるところを目の当たりにした。外は既に30 あるが、カラッとしていて汗は出ない。



12:50 にレストラン SAYOR KAFE に着く。ここは屋根がなく、日本でいう簾のようなもので日よけをしている。料理はウズベキスタンの名物料理で、ディムラマという。じゃがいも・人参・マッシュルームなどにチーズを加えてある。またスープには日本の素麺のようなものが入っていて結構美味しい。

14:05 昼食を済ませた私達はUZ国歴史博物館へ。3階建ての大きな建物で、UZ国で最も立派な博物館のようである。2階には石器時代からの歴史・生活を理解できるものが展示されている。最も注目されているのがテルメズ近くで出土したクシャン朝時代の仏像である。大きくはないが、穏やかな表情のガンダーラ仏だ。今は国民の大半がイスラム教徒であるが、長い興亡の歴史の中、キリスト教・ロシア正教などもあり、暮らしとともに宗教の一部を垣間見ることができる。

私達は1時間弱の見学の後、ホテルへ戻った。今夕はナボイ劇場を訪ねる予定になっている。シャワーを浴び、お茶を飲んでホッと一息入ると集合時刻の16:30 近くになっている。全員が揃ったところでナボイ劇場へ。約15分で到着する。私達は劇場正面の左側中ほどに刻まれたプレートを読む。そこには「1945~46年にかけて、極東から強制移送された数百名の日本国民がこのアリシェル・ナボイ-名称劇場の建設に参加し、その完成に貢献した」と記されている。またこの劇場は、1947年の直下型大地震で街中が壊滅的な大打撃を受けた際にもびくともせず、日本人の建築技術の高さ・精巧さを認識させたという。



1,500人収容可能な劇場はオペラやバレエをよく上演しており、この日はバレエ・白鳥の湖で、開演は17時。私達は規定料金(3,000スム)を支払い、チケットに記載された座席に着く。

開演前に少しトラブルがあったが、この日の演題・バレエ白鳥の湖を鑑賞。ただ、白鳥の湖を上演中に、観客へのサービスのつもりだと思うが、民族舞踊も途中に組み込んでいた。プリマドンナらが熱演していたのに、余計なものを入れて少し違和感があった。むしろ、メインの上演前に15~20分程度の前座としてサービスすればよいだろう。19:30に終了し、ホテルへ戻った私達は少し遅い夕食を楽しんだ。

## 観光・文化財保護などを学ぶ(4月24日・月)

この日は7:30にモーニングコール、9:30に出発である。8日間の日程も早いもので、今日がU

Z国での最終日になった。

前日から、観光省のルスタン・ヤブダドヴィッチ大臣の日程が確定せず、時間調整に手間取ったようだが、10:50にお会いできるとのこと。それまで少し時間があるので、ツム百貨店へ。この百貨店は日曜日には休むが、平日は午前9時から営業している。客はほとんどおらず、店員の方がずっと多い。各議員はお土産などを考えて、様々な品物を購入した。Tシャツなどは300~2,000円、絹のパジャマも約5,000円程度で求められる。感心するのは、警察官・警備員の多さで、エスカレーターの上には必ず女性が座っている。40分程度で切り上げて、観光省へ向かう。



観光省では国際部長が快く出迎えてくれた。会談の初め、ルスタン・ヤブダドヴィッチ大臣は「ここは現在、改装工事中のために大変騒がしいし、停電中だ。大変申し訳ない」と挨拶した後、日本とUZ国との関わり、また1991年の独立の際に日本がいち早く承認してくれたことに感謝すると述べた。さらに大臣は、

1991年の独立まで観光事業はすべて国の直轄事業であったが、2010年にはホテルなどの観光に必要な事業はすべて民間に移す努力をしている。

日本の観光専門家との協力体制はあるが、これをさらに強化したい。

都市における道路・水・電力・通信などの基盤整備を重要項目としている。

大規模な文化祭など多くのお祭りを企画し、集客に努めている。

環境ツーリズムも重要な柱だ。

などの説明を行った。一方、私達は、

アフガン侵攻後、危険な国だと思われるが、どのような変化が生じているか。

大阪市とタシケント市は姉妹都市であるが、関係が希薄ではないか。

世界遺産や貴重な遺跡をどのように観光客を集めるために役立っているのか。

観光客はここ数年どう変化しているか。

外国企業の進出とこれに対する税の優遇措置などはどうしているのか。

通貨は1,000スム紙幣が最高となっているが、5,000スム、10,000スムのような高額紙幣の発行計画はないのか。

空港での荷物の取扱いや検査体制には問題がある。どう改善していくのか。

などの質問をし、和やかに懇談をした。

**大臣** はこの中で、「綿・絹の生産は世界第4位で、天然ガス・ゴールの生産も世界有数であるが、ソ連時代の古い体質を中々変えることができない。さらに、アフガン戦争はUZ国に致命的な影響を及ぼし、150万人の観光客が今では24万人にまで落込み、貴重



な外貨獲得ができない」と、その悩みを述べた。

また、6月からはウェブサイトも6ヶ国語となり、この中に日本語も新たに入れる予定のようである。観光客は大幅に減少しているが、現在、アメリカ・イギリス・ドイツ・フランスの順で、日本はこれに次いで第5位とのこと。

私達は大臣の貴重な1時間を熱心に懇談し、12:08にレストラン・カサンドラへ。12:55に食事を終え、タシケント市民がよく利用するというマーケットDUNYOへ。ここは日本のコンビニと小型スーパーをセットしたような店舗である。日曜日ではないので、そんなに客はいない。次の会見予定が3時少し前ということになっているので、一旦ホテルへ帰り、荷物の整理などをした。

14:45にホテルを出発し、約10分で広告エージェンシーの「グレートシルクロード」に到着。責任者のフランギス・アヴドリーパ氏が不在のため、オルガ・ゲルマーヴァ女史が対応。約40分の短い時間であったが、女史は10月下旬の第12回タシケント国際ツーリズム・シルクロードフェアを熱心に説明した。



**前回** のフェアは350の旅行会社が参加し、100を超える成約をみたが、日本はどの旅行会社も参加しなかった。今回こそ、日本の参加を願っていると、女史は熱い期待を寄せていた。

私達が次の文化財保護委員会に到着したのは15:55になっていた。ここではディレクターのラフシャン・マンスール氏やアシロフ・サーバー・アシロヴッチ調査専門官ら多くの出迎えを受けた。

マンスール氏は「歴史遺産や伝統に深い興味を抱かれて訪問されたことに深く敬意を表す。また、日本の援助で遺跡や文化財の保存がしやすくなっていることに感謝する」と挨拶し、

現在、委員会として2ヶ所の発掘作業を行っているが、ここには日本からの100万ドルもの援助で機械設備などを整えた。

文化・遺跡の保存を訴える映画のシナリオもほぼ書き終えた。これはUZ国と日本にとっても素晴らしいものだ。仏教の始まり、原始時代の暮らしなど、45,000年前からの歴史を理解できるようにしている。

考古学的には重要な場所が3,500ヶ所以上もあり、全部の調査は到底不可能だが、この内1,200ヶ所は現在、しっかりと保存している。ユネスコとともに2015年までに修復などをやりきりたい。

独立してからまだ15年だが、教育システムの変更が何よりも重要だ。ソ連時代は遺跡や文化財は軽んじられており、まだその考えが払拭されていない。

などと、現状と課題を説明された。

また、私達からは、

修復のための技術者の養成やかつて製作された素焼きのレンガ・タイルなどの材料をどのようにして作っているのか。

保存・修復のために近隣諸国との関係はどうなっているのか。

資金はどうして調達しているのか。

などの質問をした。

マンスール氏は、「日本の文化財保護法とそれに伴う施策は保存のために大きな役割を果たしていると聞いている。わが国もこれを見習わなければならない。私自身も京都・奈良などの歴史的建造物である社寺とその保存などをつぶさに見たい」と述べた。



この後、貴重な文化財の記録や書籍類を保管している建物を案内してもらった。ここには1冊が数百万円以上するような貴重な文献が所狭しと積まれていた。さらに、保存・記録のために数多くの女性たちがパソコンに向かって仕事をしていたが、そのパソコンと横のスキャナーにはすべて日の丸のシールが貼られ、「日本の援助で購入したものだ」と感謝された。

私達は 17:00 に退出し、17:15 にホテルへ。これでUZ国での視察日程は全部終了である。この後は荷物を整理し、夕食を済ませて空港に向かうことになっている。約1時間あるので、私は早速入浴し、片付け。30分程度でポーターが荷物を取りに来るといっているのでゆっくりとはできない。忘れ物はないかとチェックしているとすぐに 18:00 になってしまった。18:15 には出発し、空港近くのレストランで、お世話になったアヴド先生を囲んでのお別れ夕食会がある。



私達は約 20 分で会場のレストラン・CARAVAN に到着したが、すでに先生はお越しになられ、私達を出迎えてくれた。ここは中々凝った建物で、昔の大きな民家を改装したような感じである。

18:40 から先生を囲む夕食会が始まった。乾杯の後、お馴染みの食事が出され、さらに先生からいろいろな記念品や民族衣装を頂戴し、全員で記念撮影。先生は「これからも日本との交流を深めたい。また日本をぜひ訪問したい」と述べられた。先生はサマルカンドの大学卒業後、ロシアで大学院、さらにイギリスへ渡りオックスフォード・ケンブリッジでも学ばれ、博士となられた。先生は愛読書の井原西鶴の英語版を出され、全議員にサインを求められた。富田・中村・土師・半田・山添・大友の順にサインし、帰国後、日本を紹介した英語本などをお届けすることを約束し、20:00 に終了。先生とお別れして、私達はタシケント空港へ向かう。

20:10 に空港に到着。21:40 発のHY0525 便でKIX着は 25 日 8:55 (時差 + 4 時間) の予定である。手続きを済ませて搭乗を待つだけとなった私達は、ラウンジで休憩。首都にある国際空港には免税店などが大抵数店並び、帰国を前にした観光客で賑わっているのだが、ここにはそんな雰囲気がない。コーヒーを頼むとネスルのインスタントコーヒーを持ってくる。考えると、日本は今、深夜。飛行機の中でゆっくりと寝ておかないと、日本到着は朝の 9 時。明日の仕事ができない。

21:10 に搭乗の案内があり、私達はチケットを持って乗り込む。私の席は 03・E で大友議員と隣合せ。かなり空席があるので、それぞれが座席を変ったりしていたが、私はウエルカム・ドリンクでまたアップルジュースを飲む。ほぼ定刻に離陸した機は 30 分程度でベルト着用サインが消えた。私もゆっくりしようとして一番前の席へ移動し、今日一日の出来事を簡単にメモ。私は旅日記を付けるのが趣味で、行く所はすべて写真に撮っている。最近はデジカメで便利になった。これを見直すと、時分にどの施設に行ったかがすぐに分かるので、一々その時にメモをしなくても、後で「しまった」ということはない。

暫らくすると、食事が出てきたが、私は「No Thank You」と断った。2 時間ほど前に食事をしたところだし、日本では今、4 月 25 日の深夜 02:30 を過ぎているのだから、こんな時間に食事をすると体を壊してしまう。私はゆっくり寝ようとビールを依頼し、時計を日本時間に合わせる。もう 02:50 である。

## 多くの思い出を胸に帰国 (4 月 25 日・火)

私は毛布と枕をもう一つずつ欲しいと、CA に持ってきてもらった。それから、1~2 時間程度をウツラウツラしたのだろうか。目が覚めて、コーヒーを頼み、旅日記を整理していると、窓の外、左少し下に微かな光が見られる。「あっ、日の出だ」と思って窓の外を思わず写真に。05:50 である。ほんの少し、またそれよりも少しずつ明るく



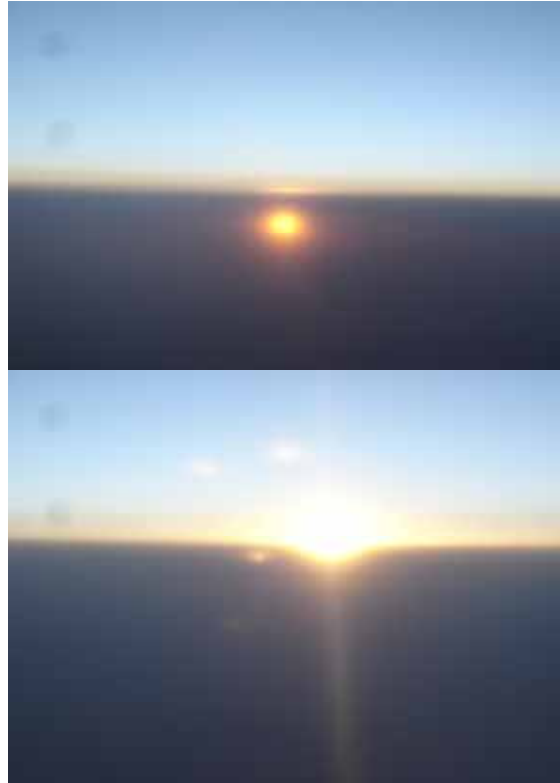


なってきた、06:14になると、雲の下、太陽の丸い姿がはっきりと分かる。毎日毎日繰り返される当たり前の光景ではあっても、私には何度見ても神々しく、心を洗われ、感動さえ覚える。06:23になると、空は一気に明るく、もうこれらを写真にすることはできない。私はこれらの様子を30枚くらい写真にした。

空が白み出した頃、遙か彼方に、空の端が1本の線で区切られたように見える。地平線・水平線があるのだから、これは空平線か天平線とでも言うのだろうか。そう名づけておこう。

日の出を見終わって暫くすると、軽食が出た。考えてみると、この時間、UZ国はまだ深夜である。何か、体調がUZ国に慣れてしまったので、もう一つ食欲は出ないが、コーヒーなどを飲んで食事をとった。暫くすると、先日から供用開始となった神戸空港が左下に見えてくる。

間もなくKIXである。到着は08:55の予定であったが、30分も早く到着した。再入国手続きなどを終え、解散。6泊1機中泊・8日間のウズベキスタン訪問は全部終了である。



## UZ国で気づいたことを少しだけ

### 1) 郵便ポストが見当たらない



私達がタシケントの市電・ミニバス・地下鉄などの交通機関を見て、さすがに首都の交通機関は整備されているなと思ったが、不思議なことに、郵便ポスト・公衆電話をほとんど見なかった。きっと、住宅街にはある程度整備されているのであろうが、それにしても少ない。電話機は少しあったが、ポストはただ1度だけ、写真のようなのを見ただけだった。

また、ホテルでも、国際通話のできる電話機がロビー階に設置されていないことは残念だ。特に、私たちが宿泊したタシケントのインターコンチネンタルなどは5ツ星である。そこにはいわけで、他都市のホテルには勿論ない。観光客のためにもぜひ、国際電話の設置を急いでほしい。

## 2) フロアの表示が実に様々

私達は国内では日常、道路に面した地上階を1階と呼び、その上を2階、3階...としている。これが海外に出ると大抵は、地上階をL階とし、日本でいう2階は1階と呼ぶことが多い。ところが、U Z国ではホテルによって表記が全く違うのである。左下写真のように、エレベーターに、地上階をH、その上を1階というように表記されているのがあれば、また右下の写真のように、地上階をL、その上をM、さらにその上(日本では3階)を1階、逆にLの下をC、その下をGと表記しているものなど、バラバラである。レストランなどで食事をした際にも異なったものがあり、本当に紛らわしい。



## 3) 30 分の時差の国があった

私達はタシケントで、JICA・日本センターでの懇談などを終え、昼食を近くのウズベキスタンホテルの17階でとった。食事を終えて下へ降りた時、私は1階のロビーの端に各国の現在時刻を時計で表示してあるのがなぜか気になった。左から、私達が現在いるタシケントが13:54、デリーが14:24、東京は17:54 というように、時計が各国の現在時刻を表示している。「おかしく感じた」のは、時差というのは1時間単位で、アナログ時計にすれば、長い針の分針は同じで、短い時間針が違うだけだと私が思い込んでいたからである。ところが、一つだけ30分という時差の時計があるから、当然おかしいと思う。まだ半信半疑で、この時計表示はあっているのかと聞くと、これで良いと言う。後で調べてもらおうと、確かにデリーは30分の時差を設けているとのこと。一つ賢くなった。





## 苦言を一言

私たちがタシケントのナボイ劇場で、白鳥の湖を鑑賞した時のこと。入場料金が3,000スム（約300円）で、このような金額で、良い芸術鑑賞ができるのは素晴らしいことだと思って、指定の席に着き、開演を待っていた。ところが、開演前にトイレにとA議員が席を立った途端に、3人の家族連れがやってきてパッと座ってしまった。「ここは違う。この席は私たちの指定された席だ」と言ってもガンとして聞き容れない。通訳を呼んで説明しても応じない。おまけに「劇場の×に了解を得て座っている」と言う始末である。

ところが、通訳は「この国ではよくこんなことがある。開演直前で、周囲の人達が何事かこちらを見ているし、近くに空席があるので、そちらへお願いする」と言う。仕方なしに私達は席を譲ったが、こんな芸術を楽しむ場所で、袖の下やコネ、あるいは出鱈目を言って、正規のチケットを持っている善良な者から席を奪い、平然としていられる感覚が理解できないし、周囲にいる者が誰も、大したことはないという顔をして見ている。席を奪った者と通訳は現地の言葉でしゃべっているわけだから、「それは君たちの席ではない」と周囲が言えば、座っていられるはずはない。こんな光景は珍しいことではなく、当たり前になっているのだろうか。周囲の人達もこんなことを時々しているから黙っているのだろうか。もし、通訳の言うとおり、これが日常茶飯事だとすれば、この国は本当に病んでしまっている。バレーを鑑賞に来ているのに、入口で警官が立ち会って、航空機と同様に金属探知機を通り、おまけにバッグの中まで検査する体制をとりながら、一方でこんなことがまかり通って、許されるはずがない。

さらに心配なことは、このような際に口出しをすると、席を奪った者が本当に警察官たちと友人であったりすれば、後で仕返しをされると思って「知らん振り」を決め込んでいることである。傍若無人に振舞う者はどの国にもいるから、仕方がない部分もある。しかし、無法行為を警察官たちが知って放置しているとすれば、これほど深刻なことはない。

## 最後にもう一言

今回の視察では多くの方々にいろいろとお世話になった。普通の観光ではまず訪問することのないUZ国での諸計画を練り、関係機関との調整などを進めてくれた人達や、頑張ってくれた添乗員に感謝する。とりわけ、一面識もなかった私達を温かくご指導いただいたアヴド先生には大変お世話になった。先生がご健勝で、これからも益々ご活躍されることを、心から願っている。

このレポートについてのお尋ねは、下記へどうぞ。

- |                   |                  |                  |
|-------------------|------------------|------------------|
| ・大阪府議会議員 中村哲之助事務所 | Tel 072-844-8888 | Fax 072-844-4444 |
| ・民主党無所属ネット議員団控室   | Tel 06-6941-0219 | Fax 06-6941-8411 |